
野球の神様

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球の神様

【コード】

N8506H

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

野球の神様、球子。どんな願い事も野球の力でかなえてみせる（つす）。

日本の国には、昔からたくさんのお神様たちがいらつしやいます。山の神様、お酒の神様、さらには学問の神様や笑いの神様などなど。これは、そんなお神様たちの一人、球子と名乗る「野球の神様」の物語です。

「……本当に神様なの？」

小さなお社でお祈りしていた野球少年の目の前に突然と現れたのは、見た目十歳前後の、おかつぱ頭の女の子でした。彼女は自らを「野球の神様」と称して、少年のお願い事を一つ叶えてくれるとおっしゃったのです。

「そうつすよ。さあどんな願いでもばつちこいつす。野球に関係ないことでも、すべて野球の力で叶えてみせるつすよ」

とっても怪しげでしたが、少年は試しに願い事を言ってみました。「えーと、じゃあ、いつも学校で僕をいじめる奴らを見返してやりたいんだけど」

球子は「隠しバット」と叫び、右手を掲げました。すると、なにもない空間から、金属バットが現れたのです。球子は驚く少年に、そのバットを手渡しました。

「そんなあなたは、これを使うといいつす」

「そつか。野球がうまくなって活躍すれば、奴らを見返せるよね」

「いいえ」球子は笑顔のまま表情を変えずに告げました。「殴るつす」

「……………」

「……………」

「えっと、さすがにそれは社会的にまずいんじゃないかなあ」

「むっ。この程度の乱闘では満足できないっすか。さてはあなたプ口っすね」

「いや、そうじゃなくって」

「いえいえ、みなまで言わなくつても球ちゃんはお見通しつすよ。なんてたつて野球の神様つすからね。そんなプロ志向のあなたにはこれつす！」

「隠しバットー」とともに、またバットが出現しました。ただし今度は木製です。

「プロは金属バット禁止つすからねー。球ちゃんうっかりしてたつすよ。しかし木製と侮るなかれ。金属バットと違って釘が装着できるのが魅力的つすよねー」

「よけい悪いつ」

「ちなみに、釘をバットに打ち込んだタイプではなく、釘のトンがり部分を表に出した逆転サヨナラバーションがおすすめつす」

「……えつと、別の願い事でもいいかな」

「どんな願いもばつちこいつす」

「じゃあ、女の子にもてたいつ」

「隠しバットー」とともに（以下略）。

「なるほど。やっぱ野球で活躍すれば、女の子の注目の的つてことだね」

「いいえ」球子は笑顔のまま表情を変えずに告げました。「これをズボンの中に装着すれば、意中の姫君も大満足」

「下ネタ禁止つ」

少年は意外に耳年増でした。

「じゃあ、あれ！ 不老不死。これでいいや」

「どんな願いでもばつちこいつす」

「隠しバツ（以下同文）。

「そんなあなたには、これつす」

「……また殴るの？」

「打ち所を絶妙のライン際に決めれば、死んだと思わないまま幽体になれるつす！ お化けは年もとらなければ、死にもしないつすよ」
「いや、それ死んでるし」

少年は疲れました。やっぱり願い事は神頼みではなく、自分の努力が必要だと知りました。もしかすると、彼女はそれが言いたかったのかもしれない。

なんて反省しつつも、少年はダメもとで最後に、もう一つだけお願いをしました。

「お金持ちになりたつてのは、あり？」

「どんな願いもばっちこいつす」

「隠しバット」とともに現れたのは、最初のと大差ないバットでした。少年は悟りました。やっぱりこれこそが基本なんだと。

「そう、だよ。お金持ちになりたいなら、野球がうまくなってプロ野球選手になればいいんだよね」

「いいえ」球子は笑顔のまま表情を変えずに告げました。「これで裕福そうな家の窓ガラスを割るっす」

「……………泥棒？」

球子は胸を張って答えました。

「ホームスチールっす」

「……………」

「ちなみに、警備員や番犬避けにもなるっすよ」

「避け、じゃなくて、しばく、だよ」

「むう仕方ないっすね。ストレートの四球待ちのあなたには、こっちの方がいいかもしれないっす」

またも現れたバットは、金色に輝く黄金バットでした。渡されると、さっきの釘バットより重いです。その重みで少年は気づきました。今までののはすべて前振りだったのだと。

「分かったよ。素直にこの重いバットで練習するよ」

「いいえ」球子は笑顔のまま表情を変えずに告げました「売るっす」

「……………」

「……………」

「あ、いいかも」

こうして、純金のバットを売りさばいた少年は、願いどおりお金持ちになりました。
めでたしめでたし。

(後書き)

野球は大好きです。

……すいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8506h/>

野球の神様

2010年10月9日19時37分発行